

マーガレット・アトウッドの *Survival* をめぐって

松 田 寿 一

はじめに

2009年の『ケンブリッジ版カナダ文学史』(*The Cambridge History of Canadian Literature*、以下『ケンブリッジ版』と略す)の出版に先立って、マーガレット・アトウッド Margaret Atwood (1939-) の研究者でもある Coral Ann Howells は共編者 Eva-Marie Kröller とともに前年、カナダ・オタワ市で行われたカナダ研究大会でこのプロジェクトにおける基本的なコンセプトを語った。「プロットを替える ―〈サヴァイヴァル〉から〈ケンブリッジ版カナダ文学史〉へ」(Switching the Plot ― From “Survival” to the “Cambridge History of Canadian Literature”)と題した講演の中で彼女は、1980年代以降の多文化主義の推進やグローバル化の進行、新しい文学理論の流入などによってネーションとしてのカナダや「カナダ性」の概念、さらには「カナダ文学」に再定義がなされている現実を踏まえて、カナダの文学史は「かつて想像されていたよりもはるかに複雑化した歴史的連続性を描き出す」必要があり、『ケンブリッジ版』には「カナダ建国当初の第一義的な要素であった人種、出身国、言語、相争う政治的信条、国を超えた結束といった多元性(plurarium)が新しい形で蘇生されつつある」(Howells & Kröller 52) と述べた。複数性の中にカナダの伝統が脈打つとしたこの書は、「個々の作家にでは

なく、カナダ性というものが変化してきた文脈に力点をおく多元的に開かれた文学史」(Howells 49) を目指した W. H. New 編集の *A History of Canadian Literature* (Second Edition 1989) の精神を継ぐものであり、歴史的には最初のヨーロッパ人と先住民とが接触した時代の社会や文学から現代の「通(間)文化的自伝文学(Transcultural Life Writing)」にまでまたがる時間を、さらにはフランス語圏ケベックの文学の流れをも鳥瞰すべく企図されている。すなわち、複眼的に映し出された多文化主義国カナダにふさわしい文学史の編纂が目論まれているわけである。それほどの内容を1巻約700頁に収めきることの成否は別として、目を引くのは出版されてすでに40年近くも経つアトウッドの *Survival* (原書は1972年、邦訳書『サバイバル——現代カナダ文学入門』は1995年に出版。以下、原書参照の場合は *Survival*、訳書参照の場合は『サバイバル』と表記する) が引き合いに出されていることである。

先の講演の中で言及した内容から推察すれば Howells は *Survival* に対して一般に受容されている以下のような像を読み込んでいる。アトウッドはこの本で、カナダ文学にはかつては大英帝国、今日では隣国アメリカによって経済的・文化的に植民地下に置かれてきた国民の精神のありよう、すなわち搾取される犠牲者(victim)と自身を同一化する心的傾向が映し出されているとの洞察に基づいて作品を分析し、英米の文学と分かち独自の文学の存在を主張した。当初から文芸理論であるとともに社会批評的な性格を有したこの本は、結果的に60年代後半から70年代に広がるカナダ国民としてのアイデンティティの探求、一枚岩的なカナダへの帰属意識を高揚させる「ナショナルな文学」の醸成に多大な貢献をすることになった。したがってそうしたプロットから抜け出る今日の試みの一つが『ケンブリッジ版』だというわけである。

確かにカナダ国民が「多数派国民である英系カナダ人、少数派国民である仏系カナダ人、先住民、そして移民、その他の社会的少数派によっ

て構成される複合的存在であって、単一同質的存在ではな」(新川 1)いと認識された「多元的国民の国家」では「同質性の物語を拒絶」した、新たなヴィジョンを探るのは必然である。アトウッド自身も 2004 年版の *Survival* のイントロダクションで「カナダ文学が存在すること、そしてそれがイギリスやアメリカの文学の二番煎じではなく、独自の歴史と地政学を持つ文学であることを証明しなくてはならなかった」当時の時代環境からカナダ文学が成長し、多くのカナダ作家が国際的な賞を受賞するようになった今日では「この本は時代遅れになっているようにも思える」(Atwood 2004: 6-7)と語っている。しかしアトウッドは、そこでの中心的な問題は今も残されたままであるとも述べている。カナダ人の外見が多様になり、アメリカからの文化侵攻が進む中で、「ここはどこか」というかつてのカナダ的アイデンティティの問いは「私たちはだれか？」に取って代わっただけで、「私たちは本当に他の人々と異なっているのか？ もしそうならば、どんなふうにか？ そしてそれは保持する価値のあるものなのだろうか？」(Atwood 2004: 10) という問いは突きつけられたままだというのである。

アーノルド・デービッドソン (Arnold Davidson) が邦訳『サバイバル』に寄せた「カナダ文学とアトウッド — 本書の意義と出版二十年後の評価について」で述べたように「『サバイバル』に対する評価は、いままでのところでは、かなり入り乱れたもの」(デービッドソン iv)であった。批判の主な論点は Howells にも見られるように〈テーマ批評〉の功罪にある。しかしこの本を「一元的でナショナルな文学論」との観点からのみ評価したならば、カナダ人及びカナダ文学についての冷静な自己認識をもとに、犠牲者であることから解放された新たな方途を探ることを掲げた *Survival* の趣意が見失われる可能性がある。むしろ批評家 Paul Goetsch が Colin Nicholson の言を借りて指摘するように、アトウッドの小説や詩などの作中に描かれた登場人物の内面の動きを辿れ

ば、アトウッドが採っているのは「カナダ国民としてのアイデンティティによって担保されるような単一的で安定したアイデンティティというコンセプトに異議を唱える立場により近い」(Goetsch 175) ののであって、後年の作品においてますます明らかになっていくように、『『寝取る女』には捏造される自己意識が露呈されるし、『グレイスという別名で』では他の誰かでもありうる自分という〈アイデンティティ〉の不確かさが強調され」(伊藤、窪田 66) ていくのである。アトウッドのナショナルな意識は植民地精神から脱するためのものであり、*Survival* にはさらにそれを越える契機こそが模索されていたのではなかったか。拙論では *Survival* をめぐるこれまでの主だった議論やテーマ創出にともなう問題点を振り返りつつ、アトウッドが示した「犠牲者についての4つの順列」の中の第4の段階とされる「犠牲者という立場からの創造的脱出」が示唆するものを通して *Survival* へのアプローチを再考したい。

I 「カナダ的な作品」の選り分け

「多文化と多文化主義のはざま——カナダ文学再考——」と題する論文の中で近年の議論も踏まえ、*Survival* をめぐる問題点を歴史的文脈の中で簡潔にまとめ上げているのは藤本陽子氏である。少々長くなるが引用したい。

「カナダ文学」の精神的支柱ともいべき評論家のノースロップ・フライ Northrop Frye が、カナダの文化的営みの特徴を観念的な「場」の形成に見出し、「それぞれに孤立して、英米の文化的源泉からも切り離された」コミュニティの中で、「法と秩序」を謹厳に守りつつ、恐ろしい外的脅威にさらされながら生きる者の心理をカナダ的であるといい、それを「駐屯地精神」と名づけたときから、カナダの多くの文学者たちはカナダ文学のカナダ的特徴を的確で才気にみちた

比喩で言い当てることに腐心し、一貫性のある「カナダ文学」の伝統が存在することを立証しようと努めてきた。そのようなナショナルリスティックな批評の中で1970年代に最も大きな影響力を持ったのが、(中略)アトウッドの『サヴァイヴァル』であった。(中略)一定のテーマにカナダという国の文学の本質を読み込む批評方法は、その後の批評家たちに継承され、フライ以来の「テーマ批評」とナショナル・アイデンティティの模索は、カナダの文学の一様式として定着したのである。カナダの国民意識を高揚させるという明確な政治的目的に方向づけられた「テーマ批評」は、必然的に「カナダ的」な作品を選び分ける作業を伴い、「カナダ的」でないものを排除し、切り捨てることによって成立していた。(藤本 1999: 11、下線筆者)

Survival がフライの批評方法の延長線上にあること、「カナダ文学」の成立は政治的意図と結びつき、「テーマ」を論証するための振り分けがなされるようになった次第が明解に説明されている。排除された一例として藤本氏が別のエッセイで挙げるのは1961年にヴァンクーヴァーで創刊された文学ニューズレター『ティッシュ』(*TISH*)に拠った若い詩人たちの活動である。ブリティッシュ・コロンビア大学(UBC)のアメリカ人教授 Warren Tallman の下、Charles Olson、Robert Duncan、Robert Creeley といったアメリカのいわゆる Black Mountain 派と呼ばれた詩人たちや Allen Ginsberg などのビートの詩人を招くなどして、アメリカの新しい詩の動きに関心を寄せていた彼らの中心メンバーには、詩人、作家、批評家として今日のカナダ文学に大きな影響を与えることなる編集者の Frank Davey の他、George Bowering、Fred Wah、Daphne Marlatt らがいた¹⁾。藤本氏はそのエッセイで次のように述べる。

彼らの活動は、今日ではカナダにおけるポストモダンのさきがけとして評価されている。ティッシュが活動を続けた60年代は、しかし、トロントを中心として文化ナショナリズムが急激な高まりをみせた時期に重なっていた。(中略) アトウッドやジェイムズ・レイニーらの詩人・作家が「カナダ性」の構築に大きく貢献していく。その最大の結実ともいえるのがアトウッドのカナダ文学論『サヴァイヴァル』(1972)であった。(中略)『サヴァイヴァル』の視座からは、遠い西部のティッシュの活動は見えてこない。彼らの運動は同時代のアメリカ詩と連動するものであり、意味の特定を回避する彼らの作風がカナダの中心的なテーマの創出に貢献することはなかったからだ。(藤本 2005: 95)

Davey を中心とした『ティッシュ』は19号(1963年)まで刊行され、編集者の交替、内容の改変を伴いながら1960年代末まで出版されていく。19号までの寄稿者にはカナダ各地の詩人の他に、先のDuncan、Creeleyらに加え、Diane Wakoski や Paul Blackburn などアメリカ詩の新しい時代を切り拓くことになる若い詩人たちの参加が見られるなど彼らの活動がインターナショナルな広がりを目指していたこともわかる。『ティッシュ』のメンバーの初期の作品自体は後年、ウィニペグ市在住の詩人で批評家のDennis Cooley が評したように一部を除けば見るべきものがない作品が大半を占めていたが (Cooley, not paginated)、*Survival* が出版された70年代初頭までには何人かは注目すべき詩集を出版しており、アトウッドもそれらを目にしていたはずである。実際 Bowering の詩については *Survival* に引用、言及がある。しかし、それらは確かにテーマに沿って選ばれたものである。4章「カナダの先住民たち」でふれられた“Wendigo”と“Hamatsa”の2編はインディアンやエスキモーの「伝説に(カナダ人である)われわれが小説や詩の源泉となる題材を求め

た」(『サバイバル』130) 作品として引例されており、しばしばアンソロジーに採りあげられる初期の代表作“Grandfather”については1頁余分の原詩 (*Survival* 135) も掲載されているが、この作品もまた藤本氏が指摘するように、「イギリスともアメリカともちがう『罨としての家族』という型にあてはめるため」であり、「カナダ西部はヨーロッパ移民の子孫の逃避先、挫折の場とみな」(藤本 2005: 95-6) すというテーマを例証するために引用されていると言えるだろう。

また、先のデービッドソンは *Survival* が「テーマ研究に依存して、美学的な形式や他の美学的考察より内容を意識して解釈することを重視したために、あらゆる方面から非難されてきた」(デービッドソン v) と述べたが、そうした批判は90年代になっても見られる。例えば『ティッシュ』の精神を受け継ぐ詩人の一人で、意味論的な要素から解放された言葉の自律性、詩における構造の変革など、言語そのものの探求にとりわけ関心を寄せる後述の日系詩人ロイ・ミキ (Roy Miki) は、90年代半ばに書かれたエッセイで、*Survival* は「テキストの物質性をないがしろ」にし、読者に「テキストが単に『国民(民族)の精神(national mind)』の傘の下でテーマやイメージを明確に映し出すだけのものであるかのよう」に思わせた」(Miki 47) と非難している。

II オンタリオを基盤とした文化定義

先の Davey からは *Survival* が「狭窄な文化定義」、「オンタリオ州を基盤とした中央集権的文学観」に基づいており、「異なる地域の多様な作家をとおしてカナダやカナダ文学を捉えようとしていない」との批判もなされた (Davey 1984: 154)。例えばアトウッドの言うところの「不気味で人を寄せつけないオンタリオ北部の自然のイメージ」がカナダの初期の探検者や祖先の移住者が一般に抱く「自然に対する恐れ」の感情へと敷衍して論じられていくことに対する不信である。そうした説明は、カ

ナダに入るときに無意識にわき上がる感情についてのフライの有名な喩え、すなわち明確な海岸線が見えてくるアメリカと違って「(船で) ベイル・アイル島を過ぎてセント・ローレンス湾に入るのはヨナが巨大な鯨に呑まれていくようなもので、周りにはカナダの5つの州があるはずなのにほとんどが見えないままであり、それはさながら未知で異質の大陸に呑まれていくようなもの」との喩えを思い出させるが、そうした感情は広大で多様なカナダの一地域にすぎないオンタリオ地方に入り込む際に人々が抱いたとフライが想像する感情にすぎないのであって、必ずしもすべてのカナダ人が共有するものではないというのである (Davey 1984: 154-155)。

Davey は *Survival* の2年後の1974年に英語系カナダ作家・詩人の紹介のために独自に編集した *From There To Here — A Guide to English-Canadian Literature Since 1960* を出版する。*Survival* の副題 *A Thematic Guide to Canadian Literature* をおそらくは意識して、「1960年以降の(つまりコンテンポラリーな)カナダの文学をテーマ批評に拠らないやり方で案内する」この本では *Survival* には漏れていた「ティッシュ」の詩人たち、「言葉の物質性」を探求し、カナダにおけるコンクリート・ポエトリー (視覚詩や音声詩など) を推進した bp Nichol²⁾、ロイ・ミキが「1960年代から70年代の国民的アイデンティティの誘惑の動きに対する解毒剤的存在」(Miki 48)と呼び、後にプレーリー (平原)州の風土と歴史に根ざしながらカナダのポストモダニズムの代表的な作家・詩人となった Robert Kroetsch などの詩人や作家に他書よりも多くの頁が割かれている。個々の詩人・作家に関する解説や評価には異論はあるかもしれないが、文芸批評家 George Woodcock が「今日のカナダ文学についての包括的でありながら、簡潔に纏め上げた最良の概説」(Davey 2011: 301) と評したように、カナダ文学の紹介としては *Survival* を補う役割を果たしたばかりでなく、新しい時代の到来をも予

見させるものであった³⁾。

III 白人の視点に対する違和

Davey に代表される批判は主に 80 年代までのものだが、90 年代に入るとカナダの国民意識の醸成と白人以外の人種や民族に対する暴力的排除の歴史を掘り起こし、国民意識そのものの再考を促す動きが見られるようになってくる。カナダが宗主国に対しては植民地（犠牲者・被害者の側）でありながら、国内では植民者（加害者・侵略者の側）であるという二重性を隠蔽するために文学が国民意識の定着にどのように関わったのかを探る方向である。先の藤本氏の論文もそうした視点を踏まえたものだが、それは 20 世紀初頭から 1960 年代まで続いた日本、中国、インドといった国々からの移民に対しての制限や差別、戦時中の日系人の強制収容などの抑圧、さらに先住民（カナダ先住民は正式な名称として First Nations「最初の民族」を採用している）の制圧の歴史を可視化することで、カナダ社会に今も引き継がれる差別構造の変革へとつなげる論点でもある。

「白いカナダ」の中で排除された側に立つものにとっては *Survival* は当然のことながら全く違った印象を与えることになる。例えば日系詩人で美術作家のロイ・キヨオカ（Roy Kiyooka）はこの本に対して抱いた違和感を友人の詩人フィリス・ウェブ（Phyllis Webb）に宛てた手紙の中で「文化ナショナリスト、つまり自らのルーツを依然としてイギリス系支配の歴史的枠組に縛りつけている者と自分の立場とは異なると認識して」おり、「アトウッドの提出するカナダ国民のアイデンティティのビジョンは、彼女の『主流派 W. A. S. P. の視点』が構築したものであって、この同じ視点が自分を人種化されたアウトサイダーとして構築しているものである」（ミキ 246）と記している。リドレス運動（日本人に対する謝罪と賠償を求める運動）の中心的存在でもあり、人種という問題をあ

えて前面に押し出すことであるべき姿のカナダを展望するミキは「私たちカナダ国民」という言葉で回収されることのできないものの総体をハイフン、すなわち「～系」と示す自己定義を提案する。なぜなら「ハイフンはさまざまな差異が接触する空間を体現して」おり、「カナダという国民の歴史を織りなしてきたありとあらゆる差異の形成」を意識させるがゆえに、「アジア系カナダ人」とする定義は「暴力的排除のうえに構築された国民について、再考をうながす力学的な形成」となるからである。さらにこうした批評意識は「作家も読者も自分たちが差異に基づく関係の結果であるとともに変化と変容の主体でもあると認識させ、新たな集合体の形式を構想する」（ミキ 249-250）可能性を有したものだという。

しかし人種や民族の違いを前景化する考え方に対してアトウッドがあえてこだわるのは、「カナダという地理的空間にいるあらゆる人を含む」とする「我々カナダ人 (We Canadian)」という意識であり、その立場は *Survival* 執筆の頃と基本的に変わらない。それは「カナダという概念そのものが崩れかかっているとき」に、まずはアメリカとの差異化をする必要があるからでもある。上野千鶴子氏との対談の中でアトウッドが「私たち」とか「私たちカナダ人」という語をしばしば使用することに対して「白人であるあなたが『私たちカナダ人』という用語を使用するとカナダの現実にある多様性（移民の人々のことなど）を隠蔽することにつながるのではないか」という旨の質問を受けた際も、大切なのは「カナダ人というものの内部で差別化することではなく、民族を超えた文化によって、差異がどこまで消滅しているかに目を向け」ることだと答えている（アトウッド、上野 289-291）。ロイ・ミキの先の文章、そして上野氏との対談も 90 年代後半のものだが、ミキとアトウッドではカナダ社会についての認識にはズレがあり、それが互いのヴィジョンの違いを生み出していることがわかる。上野氏との対談では移民の問題が挙げられていたが、アトウッドにとってカナダの現状は、それぞれの移民グループ

が互いを尊重し合いながら交渉し、新しい集合体を作り上げるといった多文化礼賛の展望が可能などころか、むしろ克服されるべきカナダ人の心的特質として『サバイバル』の中で指摘した「いわゆる『要塞志向』というものが蔓延」してきたことを憂うような事態と捉えられている(アトウッド、上野 292)。だからこそ「内部の差別化を超える」方途を探り求めるべきとアトウッドは考えるのである。

IV 白人入植者の精神的土着化に対する異議

90年代後半からは、60年代から70年代にかけての *Survival* に代表される〈テーマ批評〉に、入植者 (settler) による侵略の歴史を自然化するために先住民に替わって入植者を土地に同一化させるという意図を読み取る分析がなされる。先のロイ・ミキは、「本質的に〈侵略者 (invader)〉である〈入植者〉が暴力的な行為を巧妙に正当化 (自然化)」していく過程を論じた Anna Johnston と Alan Lawson の “Settler Colonies” (2000) を援用しながら、次のように述べている。ミキはまず *Survival* に先立ち 1970 年に出版され、「カナダ文学における主題とイメージ」を研究した D. G. Jones の *Butterfly on Rock* (『岩にとまった蝶』、タイトルは Irvin Layton の同名の詩から採られている) の序文の一節「我々は (ジョーンズは集合的な声をまとう) この土地が我々のものだという認識にとどまらず、我々が土地そのものであるという認識にまで到達した ([w]e have arrived at a point where we recognize, not only that the land is ours, but that we are the land's)」(ミキ 247、カッコ内の英文は Jones 3) についてふれ、「土地に主^{エージェンシー}体を与えることは、土着民や先住民が追い立てられたことを覆い隠」すことになるとし、Johnston と Lawson が言うところの、入植者の侵入を合法化するための「語りの土着化 (the indigenizing narrative)」を可能にしてしまうと指摘する。そして「この語りでは、入植という行動は『物理的な空間を侵略された先住

民の文化言説的な場所』に入植者を置き、入植者をその土地の『ネイティヴ』にする」。そして「ネイティヴに入植者が置き換わると、侵略という暴力は自然なもののように見える国民文化の誕生のうちにかけ消」されてしまうと指摘した（ミキ 247）。

こうした視点からはアトウッドの傑作とされ、*Survival* を執筆するきっかけの一つにもなったとも言われる詩集『スザナ・ムーディーの日記』*The Journals of Susanna Moodie* のあとがきに見られるような「たとえこの地に生まれたとしてもこの国ではみな移住者なのだ（We are all immigrants to this place even if we were born here）」（Atwood 1970: 62）というよく知られた言説も問題を孕むものとして読み直されることになる。19世紀に夫とともにイギリスからカナダに移住し、後にカナダでの開拓の経験を2冊の自伝にまとめた Moodie 夫人の内面をアトウッドが想像的に描き出したこの詩集では、入植当時は疎外感にさいなまれながらも、死後にはカナダの自然、土地の風景と一体になり、やがてカナダの精神となって夫人は現代のカナダ人に警鐘を鳴らす存在として甦る。しかし、そこには先住民の存在を抹消し、代わりに白人移住者を据え、彼らに土着化の神話を施すというプロットが無意識のうちに発動しているとも読めるのである。

Johnston と Lawson の論は植民地における「入植者／侵略者の言説」と先住民との関係について考える上で重要な意味を持つ。しかしそうした読みや問いに対しては被抑圧者であるマイノリティや女性が陥りやすい事態を警戒するアトウッドの発言も記しておきたい。それは上野氏が述べるような「犠牲者としてアイデンティティを構築することの危険」（アトウッド、上野 292）でもある。例えばアトウッドは、共に「犠牲者」であるという観点から「カナダのナショナリズムとフェミニズムは一つのもの」（Atwood 1982: 282）だと認識しているが、一方で「自分は犠牲者である、周身的である、抑圧されているとだけ自己定義をし続ける危

「危険性」を指摘する。「つねに犠牲者、被害者の立場に身を置いていると、それ抜きには生きられなく」なり、「誰もが、自分たちこそ悪い状況と想いたがる」という問題である。こうした犠牲者意識は「犠牲の階層性」へと導き、「最底辺に置かれた人が語る資格を持つ」（アトウッド、上野 293）ことにすらなってしまう。換言すれば、より悲惨なサバルタンへと自己同一化する陥穽である。ではどうしたらそこから抜け出すことができるのか。その契機のひとつは「自分は他者に対して加害者でもあることを心すること」（Atwood 1982: 282）である。例えばケベック人が自分たちは犠牲者だと見なしていてももともとは侵略者であった、というように自己相対化の視線を持ち続けることである。確かに先住民こそカナダ史における最大の被害者であることは論をまたない。しかしすべてがそこに還元されてしまうならば人間の歴史と社会のあらゆる関係世界に及ぶ植民地的支配と被支配の「パワーポリティクス」（力関係）の複雑な様相を捕えそこなうおそれがある。次節でふれるように *Survival* には犠牲者として自己認識をした（せざるを得ない）人間がいかにしてそこから「創造的に脱出するか」という課題が提出されているのである。

V *Survival* の受容の問題点と「第4の立場」

批評家 Diana Brydon は 2000 年に発表した論文においてこれまでカナダのナショナリストのテキストとして読まれることの多かった *Survival* をポストコロニアルの視点から光をあて、*Survival* の中にポストコロニアリズム批評が有するところの現実の変革への寄与といった側面を読み込んでいる。言うまでもなくナショナリズムは異なる文脈においては異なった意味合いを持つ。確かに *Survival* はカナダ内部における同質化を推進する力となり、そこから除外された人々にとっては帝国主義と同様に全体主義的なものとして映ただろう。しかし Brydon は 1960 年代のカナダにおけるナショナリズムは第三世界に広がった自治権を求

める反帝国主義運動と連動した面があり、*Survival* は英米の帝国主義的普遍主義に対抗して自国の独自性を主張し、自国の文学の存在を構築しようとしたアフリカの Ngũgĩ wa Thiong'o や Chinua Achebe のような政治的作家活動に連なるものとして位置づけられると述べる (Brydon 50)。その上で Brydon が重要な点として確認するのは以下のような観点である。*Survival* には4つの「犠牲者の立場 (victim positions)」の順列——自身が犠牲者であることを否定もしくは気付かないでいる第1の立場、犠牲者であることは認めながら、それを運命であるがごとく甘受する第2の立場、自分が犠牲者であることを自覚し、そのことに反抗し、戦う姿勢を示す第3の立場、そしてついに犠牲者／勝利者といういつ終わるとも知れないゲームから脱出し、犠牲者が自分の位置を認識し、創造的な行動を起こすことを要求する第4の立場——が提示され、「犠牲者としての体験を意識的に検討することによって、その体験を超越しようとする、そういうより現実的な欲望」(『サバイバル』34-38) が期待されていることは知られているが、それは「サバルタンの声の回復を理論化しようとする今日的試み」、つまり「抑圧され、沈黙を強いられた存在がどのようにしてそうした地位を変えることができるのか」という問題に対応している (Brydon 50)。カナダとカナダ人は「サバルタンの状況」にあるとして、そこからの脱出の方途を探る必要性こそが *Survival* の趣意であったが、そうした議論はこの本の受容の過程で消失してしまったと Brydon は言う。本来ポストコロニアルな批評性を担っていたものが〈テーマ批評〉という文学論に回収され、「現状を変革する潜在力を有していた」はずのものが「われわれの世界観を変えるのではなく、カナダ文学のカリキュラムに付け加えられるだけのもの」に墮してしまっただけということである。「勝利者対犠牲者という遊戯を時代遅れ」(*Survival* 39) のものとする「第4の立場」、すなわち植民地主義的な二項対立的モデルを超えた別の道を模索する点をポストコロニアルの理論と共有しながら

も、その批評性は鈍らされてしまったという。したがってわれわれの課題はアトウッドの個々の作品の中に内在する批評性を読み込み、それをいかにして伝えていくかということである (Brydon 50-51)。具体的な読みの実践を示しながら Brydon は、たとえどのような題材を取り上げようとも「要塞志向」から脱し、「相違を尊びながら、他者の生をも想像的に生きることのできる能力を読者の内面に生み出していくこと」 (Brydon 54) にアトウッドの文学的営為の真意があるとし、そこに二項対立を乗り越えるヒントを見出している。

確かに *Survival* が出版された頃のアトウッドの小説『食べられる女』 (*The Edible Woman*) や『浮かび上がる』 (*Surfacing*)、あるいは詩集『サークル・ゲーム』 (*The Circle Game*)、『スザナ・ムーディーの日記』等にはさまざまな形で「第3」、そして「第4の立場」が模索され、*Survival* 自体のいくつかの章には「第4の立場」への可能性を秘めるとされた作品が例示されている。それらにはいずれも私たちが絡めとられているものからの解放、「心の脱植民地化 (decolonizing the mind)」が企図されている。こうした「第4の立場」への志向をアトウッドの創作の核にあるものとして理解しているのは、例えば伊藤・窪田氏である。二人によればアトウッドの考える解放は政治的な変革によってもたらされるというよりも、「人間の内的な再生、自己と他者との関係性に託されていて、(中略)自我中心主義を脱却し、そこから離れた魂の現実といったものを強調する」のであり、結局は「わたしの中の自然、わたしではないわたし (分身=他者) との共生という問題にある」 (伊藤、窪田 62-63)。自分の無意識下に潜む自分を認識することによって「ものごとを二項対立的視点で捕らえるのではなく、両者を包括していく『統一理論』が求められているのだが、その行程は「自分自身の反省も込め他者との対話を通じてなされていくという気の遠くなるような」営みだという (伊藤、窪田 65-66)。

また大熊昭信氏は「誰が『盲目の暗殺者』を編集したか」と題する論文でアトウッドが織り成す物語の迷宮を次のようにまとめ上げながらアトウッドの「第4の立場」についてふれてゆく。

この作品が提示しているのは、言説の背後に現実といったものはない。総ては言説から成立しているという認識である。そのうえで、では、人間はいかに自己の生を紡ぐかという問題を投げかけているのが、この作品であるということになる。このいかにもポストモダンな認識に基づいた設問に対する答えが、「現実を語りなおすことで改変する」ということだったのだ。(大熊 270)

さらに大熊氏は「お仕着せの物語を脱ぎ捨てる時、人間は自己のアイデンティティを見出す」のであって、「もっと正確に言えば、アイデンティティなどそもそもないということを自覚するのだ」という。そうしてみるとアトウッドにとってカナダのナショナリズムとは自己解放の順列で言えば「自分が犠牲者であることを自覚し、そのことに反抗し、戦う姿勢を示す第3の立場」に位置づけられる。「犠牲者ではなく、創造的な者」である「立場4」に至るにはまずもって抑圧的な社会的な外因を取り除かれなければならないからである。しかし、この抑圧をめぐる現状認識とその先のヴィジョンがロイ・ミキとは見解を異にするところとなる。つまりアトウッドにとって現在のカナダの内部社会はかつての支配と被支配というような構造を必ずしも映し出してはいない。その限りにおいて、例えば上野氏との先の対談においても「犠牲者、被害者」の立場に身を置き、「自分たちこそ誰よりも悪い状況」だというのは真実ではなく、「その立場をとる必要がないなら、どうしてこだわるのか」(アトウッド、上野 292) とさえ語るように、アトウッドは、仮に犠牲者であったとしてもそのことでアイデンティティを確立するような立場からは離れるよう

促しているのである。大熊氏は *Survival* の「立場4」のヴィジョンこそアトウッドの近年の作品にまで貫くものとして次のように述べている。

(第1から第3までの人間はすべて)侵略の犠牲者という物語の変奏を生きているにすぎない。だから、そうした物語の呪縛から一步離れろとアトウッドはいうのである。それが四つ目の立場である。それこそ作家アトウッドの立場であり、そのポストコロニアリズムである。それは犠牲者にまつわるさまざまな言説から、悠然として逸脱した地点を指し示しているが、そうした地点に立つようにどうやら読者を促しているのである。小説『盲目の暗殺者』の言葉の迷宮を通り抜けることで、読者はそれぞれ思い思いの犠牲の呪縛から逸脱せよとっているのだ。(大熊 273-274)

このように大熊氏はナショナリズムでは括りきれないどころか、国家や民族とかに帰属するアイデンティティを超えた地点にまなざしを向けてきたアトウッドを見てとる。しかし、そのような視線はどのような形で可能となるのだろうか。ロイ・ミキラの批判や指摘を踏まえた上で、アトウッドの具体的な作品の中にそうした「立場」がどのようなさまで表れているか、それを検証することが今後の課題のひとつとなる。

おわりに

アトウッドが作家活動を始めた当時は「カナダにも作家はいるかもしれないけれど、優れた作家などいないに決まっている」「素晴らしい優れた場所はかならずどこかよそにあるに決まっている、文化的所産はよそで作られるに決まっている」(アトウッド、上野 289-290)というのが普通の見方だった。「植民地精神」は自分という存在が無価値で、真正ではないと思込ませる。気を滅入らせるような被抑圧者としての自己認識

を出発点にし、それを乗り越えるべくカナダ文学を牽引してきたひとりがアトウッドである。〈テーマ批評〉は多くの専門家や批評家から批判も浴びてきた。しかしデービッドソンが述べるように、テーマに関する批評は「カナダ文学をなんとか概説しようという試み」であり、そうした試みがあったからこそ、「他の後続く研究方法（美学的・構造主義的・ポスト構造主義的なもの）も可能とされた」ことは確かである。それは「カナダ『文学』が文学として確立される、そして真剣な研究対象となり得るためには、まず『カナダの』文学として確立しなければならない」（デービッドソン v）からなのである。

60年代からのカナダ文学の隆盛のさきがけは詩の領域であった。テーマに基づいてということではあるが、*Survival* にはこの本が出版されなければカナダ国外では知られることのなかったであろう多くの詩人の作品が採り上げられている。シンガー・ソングライターとしても国際的に知られる Leonard Cohen は別としてもアトウッドやマイケル・オンダーチェが最も偉大なカナダ詩人のひとりと賞賛する Al Purdy、あるいは John Newlove、Alden Nowlan、Dennis Lee、Milton Acorn などといったカナダの風景や精神風土を詩行に強く滲ませている詩人たち、さらには「第4の立場」のヴィジョンの例示という重要な場面で取り上げられた Irvin Layton や bill bissett の作品もしかりである。もちろん同時期に出版された Davey の *From There to Here* も貴重な企画であったことは疑いを得ない。しかし *Survival* はさまざまな角度からの読みの可能性を秘めつつ、カナダ文学の存在を知らしめる礎になった。これまで見てきたように *Survival* のプロットがひとつに収まるわけでもないとなれば、Howells の〈プロットを替える〉との提言は必ずしもあたらないかもかもしれない。しかし、*Survival* のその後の影響力に鑑みれば、今なお引き合いに出されるのには納得がいくのである。

注

- 1) 「アメリカ文化の模倣的流入」だとして *TISH* の活動に対して批判的な本に Keith Richardson の *Poetry and the Colonized Mind: TISH* (1976)がある。論点に偏向が見られるが、当時のカナダのナショナリスト文学者の心情を表わしている例として参考にはなる。また *Survival* の中で何編もの詩が引用され、後年カナダの「国民的詩人」とも称された Al Purdy (1918-2000) は、アメリカの文化的侵略に対して強い嫌悪感を抱いており、彼らの活動を「よく言うと Black Mountain 派に感化された連中、悪く言えば猿真似 (slavish imitators)」(Purdy 232) とまで揶揄した。一方の Davey は批判を受けながらも、「Purdy のナショナリストティックな感情や彼の詩の主題は大方のナショナリストの分析よりもはるかに洗練されたものであり、単純に彼をナショナリストと考えることはできない」(Davey 237-238) という主旨のことを述べている。
- 2) アトウッドは視覚詩、音声詩、あるいはさまざまなジャンルに跨るような実験的な詩（いわゆるアヴァンギャルドな詩）へのアプローチを自分とはとらないとしている。あるインタビューで bp Nichol のような試みをしない理由を問われたとき「言葉を探究する方法はひとつではないし、すでに他の人々が長年行って来たことをなせしなくてはならないのか」と答え、逆に「彼らになぜ私たちのようなやり方で書かないのかと尋ねてみては？」(Atwood 1990: 69) と問い返している。
- 3) *Survival* がカナダの文芸批評本としては異例の販売冊数をほこり、各国語に翻訳され、版を重ねているのに対し、*From There To Here* は絶版のままである。日本でも *Survival* は邦訳書とともに多くの図書館が所蔵しているが、*From There To Here* の方はわずかに 1 大学 1 冊であった。

引用文献

Atwood, Margaret (1970) *The Journals of Susanna Moodie*. Toronto: Oxford University Press.

Atwood, Margaret (1972) *Survival*. Toronto: McClelland and Stewart.

- Atwood, Margaret (1982) *Second Words*. Toronto: Anansi.
- Atwood, Margaret (1990) *Conversations*. Earl G. Ingersoll (ed.), New Jersey: Ontario Review Press.
- Atwood, Margaret (2004) "Introduction," in *Survival*. Toronto: McClelland and Stewart.
- Brydon, Diana (1996) "Beyond Violent Dualities: Atwood in Postcolonial Contexts," in Sharon R. Wilson, Thomas B. Friedman, and Shannon Hengen (eds.), *Approaches to Teaching Atwood's The Handmaid's Tale and Other Works*. New York: The Modern Language Association of America, pp.49-54.
- Cooley, Dennis (1978) "Three Recent Tish Items," in http://uwo.ca/english/canadian_poetry/cpjrn/vol03/cooley.htm.
- Davey, Frank (1974) *From There To Here*. Vancouver: Press Porcepic Ltd.
- Davey, Frank. (ed.) (1975) *Tish No. 1-19*. Vancouver: Talonbooks.
- Davey, Frank (1984) *Margaret Atwood: a Feminist Poetics*. Vancouver: Talonbooks.
- Davey, Frank (2011) *When Tish Happens*. Toronto: ECW Press.
- Goetsch, Paul (2000) "Margaret Atwood: A Canadian Nationalist," in Reingard M. Nischik (ed.), *Margaret Atwood: Works and Impact*. New York: Camden House, pp. 166-179.
- Howells, Ann Coral & Eva-Marie Kröller (2009a) "Switching the Plot — From 'Survival' to the 'Cambridge History of Canadian Literature'" in Anctil, Pierre, André Loiselle & Christopher Rolfe (eds./dir.), *Canada Exposed*. Brussels: P.I.E. Peter Lang, pp.45-60.
- Howells, Ann Coral & Eva-Marie Kröller. (eds.) (2009b) *The Cambridge History of Canadian Literature*. New York: Cambridge University Press.
- Johnston, Anna & Alan Lawson (2000) "Settler Colonies," in Henry

- Schwarz and Sangeeta Ray (eds.), *A Companion to Postcolonial Studies*. Oxford: Blackwell, pp.360-376.
- Jones, D.G. (1970) *Butterfly on Rock*. Toronto: University of Toronto Press.
- Miki, Roy (1998) *Broken Entries*. Toronto: The Mercury Press.
- New, W.H. (2003) *A History of Canadian Literature*. Montreal & Kingston: McGill-Queen's University Press.
- Purdy, Al (1993) *Reaching for the Beaufort Sea*. Madeira Park, BC: Harbour Publishing.
- Richardson, Keith (1976) *Poetry and the Colonized Mind*: Tish. Ottawa: Mosaic Press.
- アトウッド、マーガレット (1992) 『スザナ・ムーディーの日記』平林・久野・カレン訳、国文社。
- アトウッド、マーガレット (1995) 『サバイバル — 現代カナダ文学入門』加藤裕佳子訳、御茶の水書房。
- アトウッド、マーガレット、上野千鶴子 (1997) 「カナダ文学が認知されるまで」『世界』10月号、282-294頁。
- 伊藤 節、窪田憲子 (2003) 「マーガレット・アトウッドの作品における犠牲者、無意識、記憶、物語ることなど」『カナダ文学研究』11、63-66頁。
- 大熊昭信 (2003) 「誰が『盲目の暗殺者』を編集したか — マーガレット・アトウッドの『盲目の暗殺者』を読む」『二十世紀英文学再評価』二十世紀英文学研究会編、金星堂、259-276頁。
- 新川敏光 (2008) 「カナダにおけるナショナル・アイデンティティの探求と超克の旅」『多文化主義社会の福祉国家 — カナダの実験』新川敏光編著、ミネルヴァ書房、1-39頁。
- デービッドソン、アーノルド (1995) 「カナダ文学とアトウッド — 本書の意義と出版二十年後の評価について」『サバイバル』、加藤裕佳子訳、御茶の水書房、i-xii頁。
- 藤本陽子 (1999) 「多文化と多文化主義のはざま — カナダ文学再考」『カナ

- ダ研究年報』19、1-18頁。
- 藤本陽子（2005）「ハイフンからの眺め——フレッド・ワーとカナダ文学の文脈」『現代詩手帖』2005年5月号、思潮社、92-97頁。
- 藤本陽子（2008）「過去へ、現在へ——新世紀のカナダと文学の力」『多文化主義社会の福祉国家——カナダの実験』新川敏光編著、ミネルヴァ書房、203-229頁。
- ミキ、ロイ（2008）「差異が生み出す差異」『多文化主義社会の福祉国家——カナダの実験』新川敏光編著、ミネルヴァ書房、230-251頁。